

ふるさとの伝統文化を学ぶ

横田中学校生がたたら操業に挑戦

横田中学校の生徒十九人が、七月三十一日、八月一日の二日間にわたり、大呂の鳥上木炭銚工場（日刀保たたら）でミニたたら操業を体験しました。

この体験会は、昭和六十三年から始まり、今年で二十回目となります。

これは、同校のふるさと教育の一環で、地域の伝統技術に触れることを目的に、夏の恒例行事となっています。

初日は、たたら吹き（くわい）の国選定保存技術保持者の木原明村下の指導により、「たたら」についての基礎的な講義を受け、炉づくりや砂鉄乾燥、炭割りなど操業の下準備を分担して行いました。

二日目は、吹き（くわい）の内に風を送り、木炭を熱して温度を上げた炉に、砂鉄と木炭を交互に入れ、温度を測定しながら、たたら操業に取り組んでいました。

火入れから八時間後、真っ赤に熱せられたケラ（日本刀

の材料になる玉鋼を含んだ鉄の塊）が取り出されると、生徒達からは、大きな歓声が上がっていました。

今回は砂鉄八十五キロ、木炭百三十キロから、約二十七キロのケラが出来ました。

木原村下は「世界に誇る『たたら製鉄』は歴史と文化があり、そこには、モノづく

りの原点である技術や精神があります。今回の貴重な経験を、これからの人生に生かしてほしい」と話がありました。生徒達にとつて、この二日間は一生の思い出になることでしょう。



▲ 炉に砂鉄を入れる中学生

三成発電所管理橋完成 三成小学校児童が 記念絵画作成



▲ 斐伊川の生き物を着色する児童

昨年七月の豪雨で被災し、代替工事が進められていた県営三成発電所の管理用橋「さつき橋」が六月末に完成したことに合わせ、七月十日、三成小学校の四年生二十六人が完成イベントとして、横断幕の絵画着色に挑戦しました。

同校は今年度、斐伊川の学習を通して、水と自然の環境を学んでいます。

七月二日には、島根県企業局の職員を講師に招いて、自分たちの暮らしを支える自然環境エネルギーについての出前講座を受け、今回の着色もその一環として行われました。

児童は、縦一・五段、横九

段のビニールシートいっぱいにあらかじめ斐伊川のきれいな流れをイメージして描いた下絵の上に、ペンキを使って生息しているカニやウナギなどを鮮やかに着色、カラフルに仕上がった横断幕は、早速発電所のペランダに掲げられました。

また、児童らは発電所内も見学し、地域資源を活かし、二酸化炭素を排出しないクリーンな国産エネルギーとして、年間千五百四十万kwhを発電し、町内に供給されている水力発電の役割についても理解を深めていました。

船通山宣揚祭

神話「ヤマタノオロチ」の舞台となった船通山で、須佐之男命がオロチを退治したときに尾から出た「天叢雲剣」の出頭を記念した神事「宣揚祭」が七月二十八日、山頂で開催されました。

船通山は、島根県、鳥取県の県境に位置することから、毎年奥出雲町、日南町が協力して行っています。

今年も、夏山の安全と両町の無病息災を祈る剣舞の奉納があり、関係者をはじめ、一般の登山者など約百五十人の出席のもと盛大に行われました。



▶ 山の安全を祈り剣舞の舞